

弘前大学

学園だより

題字：佐藤 敬 学長



絵：「百合」制作／教育学部生涯教育課程 竹洞成美

I 特集 施設紹介	
イングリッシュ・ラウンジ	2
附属図書館	6
II 芸術祭プレミアム	10
III 研究室紹介	
保健学研究科	12
IV 海外だより	18
V 新任教員紹介	20
VI けいじばんコーナー	20
VII 編集後記	22

特集

施設紹介

イングリッシュ・ラウンジ紹介

国際交流センター
英語コミュニケーション部門長
中村 裕昭（内線 3716）
hiroaki@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学学生の英語コミュニケーション力向上を目指して設立されたイングリッシュ・ラウンジは、本年4月9日にオープンして以降、精力的に英語会話や異文化間コミュニケーションを体験する機会を提供し、多くの学生に利用されてきました。イングリッシュ・ラウンジは総合教育棟2階国際交流センターの前のアクセスしやすい場所にあり、ネイティブスピーカー教員4名と日本人教員2名からなる6人の教員で運営や教育に当たっています。まず最初にスタッフを紹介しましょう。ラウンジ長はシャリー・バーマン准教授（女性）でハワイ出身です。日本語がとても上手で、ラウンジの運営、教育のほかにムービー・ナイトという金曜夜にTV番組や映画を見ながら学生と談笑するというとても楽しいイベントも主催しています。オーストラリア出身のアダム・セラグ准教授もラウンジの運営、企画を担当するとともに初級者限定のランチ英会話など楽しいセミナーを担当しています。アメリカ出身のブライアン・バードセル講師とカナダ出身のエリザベス・ヨシカワ講師は世界の様々な国々で暮らした経験を持ち、学生との英会話の中で言葉だけでなく、文化や慣習についてユーモアたっぷりに紹介しています。4人のネイティブの先生に加え、TOEICやTOEFL、基礎の文法や英会話、授業の補習などを指導するために、2人の日本人教員、中村と村山講師がいて、各種セミナーや個別指導、留学相談を担当しています。訪れる学生の皆さんから「イングリッシュ・ラウンジは弘前大学の小さな外国ですね」という言葉を聞くことがあります。ラウンジの無国籍の雰囲気はスタッフの出身地の多様性と国際的な経験から生まれているのです。

イングリッシュ・ラウンジがどのようなところかを知って頂くために、始めて訪れる学生の視点に立ってラウンジを紹介してみましょう。

本学文京町キャンパスの総合教育棟に入り、国際交流センターの標示がある階段を上ると左手すぐにイングリッシュ・ラウンジがありますから、勇気を出して入ってみましょう。まず受付の職員に皆さんがラウンジで学びたいと思ったことを伝えてください。



まず受付の職員に何を学びたいか伝えましょう、あなたは英会話？

英会話を習いたい、TOEICなどの指導を受けたい、異文化に触れてみたい、授業でわからないところを見てほしい、など来訪の目的は何でもよいのです。入ってすぐのスペースは英会話のためのスペースに割り当てられ、ソファのセットがいくつか置かれています。ネイティブの先生の方から笑顔でNice to meet youと迎えてくれますので、はきはきした声で答えましょう（ここがポイントです）。

ネイティブの先生たちはとても親しみやすく、ユーモアがあり、英語も学生さんたちのレベルに合わせてくれますから、心配はいりません。時間をかけて皆さんが伝えたいと思ったこ



英会話は楽しく学ぶのが一番身につきます



ネイティブの先生に英語で日本文化を紹介

とを英語で言ってみれば、きっと皆さんの言わんとするところはわかってくれます。

英語が通じた、という喜びは言葉を学ぶものにとって何のものにも代え難い経験で、進歩につながる貴重な動機づけを与えてくれるのです。

皆さんの目的が授業に関する質問だったり、英語や留学についての相談だとすれば、次のスペースまで進みましょう。入ってみるとテーブルと椅子が数セットあり、独習用のコンピュータが並んでいます。ここではTOEIC/TOEFLや基礎英語、基礎英会話などのセミナーに参加したり、コンピュータを使って自習用のソフトウェアでリスニングやシャドーイングを自由に練習することができます。しかし、このスペースの最も大きな特徴は授業や発表、論文から留学までどんなことでも個人的な相談にのってもらえることでしょう。学生が教員に1対1で気さくに質問や相談できる機会はなかなかありません。どんな小さ

な疑問でもイングリッシュ・ラウンジに来れば、きっと探していた答えが見つかるはずです。

イングリッシュ・ラウンジは平日は毎日午前10時から午後1時までと午後2時から5時まで開いていて自由に来所し退出できます。そのほか夕方遅くまで開いている日や、夜映画などをネイティブの先生と一緒に見るイベントもありますから、ホームページをチェックしましょう。イングリッシュ・ラウンジという名前からもわかるように、ここは教室でも、研究室でもありません。学生ならいつでも気軽に訪れて英語を学び、異文化に触れ、個人的な質問や相談にも答えてくれる、そんな気さくて楽しいところです。



マンツーマンで英語のクリニック

さてイングリッシュ・ラウンジの今後の方向についてお話しします。最初半年間ラウンジは英会話を中心に、学生諸君の個人的なクリニックと小さなセミナーを行ってきました。学生の中には英語の習熟度に大きな相違があり、英語に自信が持てず最初の一步をラウンジに踏み出せなかった人がたくさんいると思います。教員たちも単なる英会話以外に学生に対して教育的なアプローチが必要だとも思っています。後期からは基礎英語の講座、TOEIC、TOEFL、リスニング、発音、語彙の充実など多彩なセミナーを開講していきますので、これらを受講することで英語力を着実につけていきましょう。もちろん、ネイティブの先生たちとの自由な会話や個人的な相談

I 特集 施設紹介

などはこれまで通り随時受け付けます。またインターネットを経由して特定の先生との予約を取ることもできます。私たちはいろいろな英語学習の窓口を提供していきます。



先生、スピーチ原稿の書き方教えてください。

またイングリッシュ・ラウンジの地域貢献の一つとして、弘前市や周辺の小中学校の教員向け研修を開催したり、大学院生向けのセミナーやアブストラクト、論文の書き方の指導、個人的な英文チェックなども行っていきます。一口に英語といっても学ぶ目的は様々ですから、私たちもニーズに合わせてたくさんの企画をしていきますので、学生、大学院生の皆さんも機会を捉えてどんどん利用してください。



地域貢献活動の一環として一小学生たちが初めての英会話

最後に少しだけ難しい話をさせてください。なぜイングリッシュ・ラウンジのような施設が今年弘前大学に生まれたのでしょうか。当ラウンジの設立の目的は、本学学生の総合的

な英語力を向上させ、実践を通じて英語によるコミュニケーション力を身につけた学生を育てることです。これまでも弘前大学は教育と研究の両面で国際交流を重視し、本学学生を海外提携大学に送り出すとともに、アジア、ヨーロッパ、アメリカなど様々な国々からたくさんの留学生を迎えてきました。今後海外の大学とよりいっそう活発に交流活動を行うためには、本学学生や大学院生の外国語、特に英語によるコミュニケーション力の強化が非常に重要な課題となっていきます。また学生の皆さんは卒業後も仕事や研究の様々な機会海外を訪れ、外国の方と議論や交渉を行っていくことになるでしょう。そこで皆さんに必要なのは海外旅行で使う最低限のサバイバル・イングリッシュではありません。外国の人たちと英語で対等に渡り合い、時には競争さえしていかななくてはならない学生の皆さんにとって必要となるのは真の英語コミュニケーション力といえるでしょう。そのような大切な技能を時間的に制限された授業の教育だけで培うのはそもそも困難です。イングリッシュ・ラウンジは英語の多様なスキルや国際感覚をいつでも学べる総合的な環境を提供するという非常に大きな使命を担った施設ですが、一方その有益性は利用する学生諸君の意欲と姿勢にかかっているのです。今日本の若者に求められているのは真の自律性だと思っています。受け身の授業だけでなく、学生自らが学ぶべきことを探し、そして実際に行動に移す—そのような積極性こそ、厳しい世界情勢の中で活躍することを期待されている日本の若者に不可欠な資質となっていくでしょう。イングリッシュ・ラウンジは「弘前大学の小さな外国」として学生の皆さんが自ら英語力を身につけたいと思ったとき、全力でその欲求に答え、英語を話し、異文化間コミュニケーションに親しむそんな場をどんどん提供していきます。私たちがぜひ強調したいことは、イングリッシュ・ラウンジは、英語が得意な学生のためだけのクラブのような存在ではない、ということです。現在の学

生諸君のほとんどが将来社会に出たとき、程度の差はあれ実践的な英語力を必要としていくのですから、私たちは英語が苦手な人たちこそ、ぜひラウンジを訪れてもらいたいと切に願っています。



ランチを取りながら英会話

私たちイングリッシュ・ラウンジの教員は今後も様々なレベルのセミナーやイベントなど、楽しく英語に触れつつ、着実に英語コミュニケーション力を身につけていけるような機会を学生諸君に提供していきます。

ぜひ以下のイングリッシュ・ラウンジのホームページをチェックしてみてください。そして少しの勇気を出してこの小さな外国を体験してみてください。

イングリッシュ・ラウンジのホームページ
<http://culture.cc.hirosaki-u.ac.jp/EL/Welcome.html>



総合教育棟2階平面図

附属図書館

館長 長谷川 成一

私が、平成20年（2008）4月に、附属図書館長を拝命してから、附属図書館のモットーである「学生のための教育・研究支援を目指す」を職員とともに再確認し、ハード・ソフトの両面において種々の事業を展開してきました。館長に就任して一番最初に実施したのは、かねてより学生・教職員からの要望の高かった、お昼の時間帯に閉じていた参考調査カウンターを開いたことでした。これを手始めとして、年2回の職員研修を実施して、職員による接遇のロールプレイングと講師の講評を通じて、応接の改善を図りました。そのほか、五ヵ年計画による文系図書の充実、「官立弘前高等学校資料」の整理と公開、「津軽領元禄国絵図写」の発見と公開、昨年からは本館所蔵貴重資料のデジタルアーカイブによる公開など、ソフトの面でも可能な限り改善に努めてきました。一方、ハードの面では、前学長の遠藤正彦先生のご指導とご配慮により、以下にご紹介する各施設の充実や飛躍的な改善がなされました。

このように、ソフト・ハード両面でも事業展開を進めてきた附属図書館ではありますが、利用している皆さんにとって、未だ不満な点もあろうかと思えます。今後、附属図書館のさらなる発展と改善のため、館長以下職員一同精励する所存ですので、いっそうのご支援をお願いします。

新たに整備を行った施設及び資料の紹介

1. PCサテライト・リニューアルオープン

平成23年2月1日に附属図書館2階に端末機30台あったPCコーナーを3階に移設し、新たにPCサテライトとしてリニューアルオープンしました。



附属図書館のPCコーナーのパソコン端末は、総合情報処理センターのサテライト設備ですが、学内の立地条件に恵まれているせいか、同センターが設置しているPCサテライトのうち、最も利用率の高いサテライトです。

今回のリニューアルでは、3階の無線LAN・視聴覚室94㎡を改修し、ここにコーナーを移設することで端末機20台を増設し計50台にしました。これにより狭隘化と混雑は緩和されました。加えて、一つの部屋として仕切り、電源やLANケーブルは、床下配線として利用者の移動の妨げにならないよう配慮し、通路側の壁は開放感のあるガラス壁としました。

2. 「文庫・新書コーナー」等の整備



文庫・新書コーナー

平成23年4月26日、図書館所蔵の文庫・新書約3,000冊を集約した「文庫・新書コーナー」を設置しました。

「文庫・新書コーナー」には、それまで旧書庫や開架書架に配架されていた「岩波文庫」「岩波新書」「岩波現代文庫」「岩波ブックレット」

「東洋文庫」「白水社文庫クセジュ」「講談社学術文庫」「講談社選書メチエ」「ちくま新書」「中公新書」「人物叢書」が配置され、利用者がゆったりと閲覧できるように、中庭に面した窓際にソファを設置しました。

また、周辺には、「ピーターパン・バリ文庫」「太宰治研究文庫」「津軽学コーナー」など既存の文庫コーナーを集約し、他大学の出版会出版物を集めた「出版会出版物コーナー」を新設、さらに附属図書館の文系図書整備事業で購入した資料を配架しました。研究調査に、あるいはちょっとした息抜きに「文庫・新書コーナー」を是非ご利用ください。

3. コインコピー機の増設

以前より学生の皆さんから増設を望む声が寄せられていたコインコピー機を弘前大学生協の協力をいただき、平成23年6月24日に新たに整備しました。あわせて、以前は書庫内にあった既設のコインコピー機を参考図書室に移設を行いました。これにより混雑が緩和



メインカウンター横（新設）

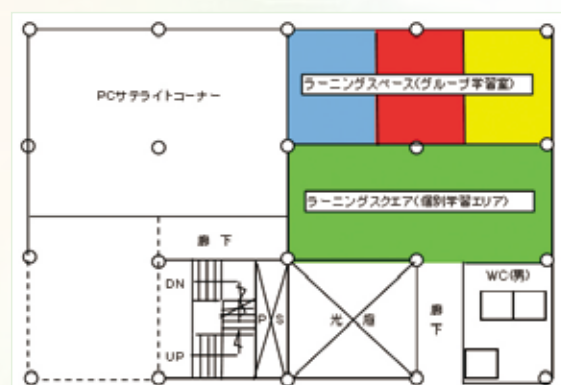


参考図書室入口（新書庫2層より移設）

され、学外者も含め利用者の利便性の向上が図られました。

4. ラーニングスペース・スクエアのオープン

平成23年10月19日から全面オープンしたラーニングスペース・スクエアは、全てグループでの利用が可能な施設となっています。多様な学習環境を提供する「学びの場」の充実の一環として、学習形態の変化に合わせて、グループでの議論や共同作業、発表ができる



本館3階整備図面



本館3階ラーニングスペースとスクエア

新しい空間です。図書館内資料や図書館ホームページ等で提供している電子的資料も利用できるよう各種情報機器も整備しました。なお、ラーニングスペース・スクエア以外のフロアは従来どおり静かな空間を維持することとし、目的によって使い分けられるようになっています。

○ラーニングスペース

(Learning Space : グループ学習用3室)

可動式の机・椅子・電子ホワイトボードを用意し、各室を仕切っているパーティション

I 特集 施設紹介

を取り外すことにより多人数（最大30名程度）での利用も可能としています。少人数のグループ学習やゼミ発表等のリハーサル、セミナー開催など多様な学習スタイル対応しています。液晶プロジェクター、館内貸出用PCも整備しましたので是非ご活用下さい。なお、ラーニングスペースの利用予約は電話（内線3162）又は直接来館による予約もできますが、図書館HPのMy Libraryからも申請できます。

○ラーニングスクエア

（Learning Square：個別学習エリア）

無線LANの環境が整備されており、持込のPCを利用しながら、資料も余裕で広げることのできるテーブルを設置しています。利用予約の必要はありません。個人でのレポート作成、グループでのディスカッションなど、多様な利用を可能としたスペースです。自習のための新たな空間を是非ご利用ください。

5. 「津軽領元禄国絵図写」 デジタル版の公開

附属図書館では多数の貴重資料を所蔵しますが、資料の破損・劣化及び散逸防止のために、原本の利用に関しては制限を設けています。



附属図書館HPで公開している
「津軽領元禄国絵図写」

原本は滅多に公開できませんでしたが、以前より貴重資料について県内はもとより全国の研究者から研究素材としてデジタル化での公開要望が多く寄せられていました。平成23年度より貴重資料のデジタルアーカイブ化を計画し、その第一弾として同年11月に大型絵

図「津軽領元禄国絵図写」を図書館ホームページ上に公開しました。

附属図書館では、引き続き第二弾、第三弾の本学所蔵の貴重資料のデジタルアーカイブ化を計画しておりますので、ご期待ください。

6. 教職関連資料コーナーの整備



教職関連図書コーナー（参考図書室入口）



専用閲覧机

教育学部のみならず全学の教職を目指す学生の利用に供するために附属図書館本館内に「教職関連資料コーナー」を設置しました。

「教職関連資料コーナー」には各教科・学年毎の指導書や指導要領など約770点（約1,000冊）が配

架されており、専用の閲覧机が置かれています。また、このコーナーの資料は多数の利用者が見込まれるため館外への貸出は行わず、原則館内閲覧のみとしました。

「教職関連資料コーナー」の設置により、今後より多くの学生が教職に興味関心を持ち、志すようになることを期待しています。

「太宰治（故津島修治氏） 自筆ノート」について

平成21年（2009）9月、本学では、小野正

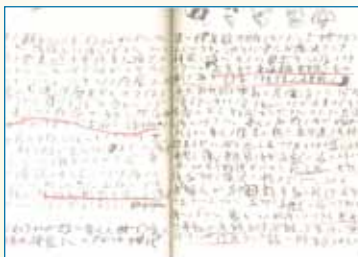


英語ノート表紙

の修身の講義を書き留めた自筆の大学ノートです。サイズは、2点ともに縦210ミリ・横165ミリ、横罫線23行のノートです。

英語のノートには、文学作品の現代語訳が記されていますので、第1年次の英語「読方読解」の授業の時のものと推測されます。ノートは途中まで記された後、最後から天地逆に再び使用されており、途中、中断しています。表紙、裏表紙、表見返し、裏見返しにも落書き（イラスト）があり、その大半は肖像画と英語・日本語による自己の署名などです。

修身ノートは、修身の講義を記録したもので、「吾人ノ国家観及び吾国体」「国家ト個人ナラビニ愛国心」などの4章から構成されて微温的な国体論を展開する内容になっています。英語と同様、修身のノートも38ページまで使用されており、あとは白紙で、終わりの部分には7ページにわたる落書きが記されています。表紙、裏表紙、表見返し、裏見返しにも



修身ノート

初期の高等教育機関であった官立高等学校において、どのような教育がなされていたのかを研究する上でも貴重な価値を持ちます。また、当時の文部省の高等教育に関する方針や、現場の教員の思想、教育の姿勢などを考察するのに資する資料でしょう。

しかし、当ノートにおいて太宰独自のユニークな価値を持つのは、あふれるほど描か

俊氏（神奈川県逗子市在住。著名な郷土文学研究家小野正文氏のご子息）から、2冊の太宰治（故津島修治氏）自筆ノートを寄贈されました。昭和2年（1927）に官立弘前高等学校に入学した太宰が、第1年次の英語と第2年次

れている落書き（イラスト）ですし、ご覧になった皆さんも圧倒されるに違いありません。描かれた人物はいったい誰なのか、描いた意図は何だったのか、素材となったのはどのような史資料であったのか、課題は尽きません。附属図書館では、平成22年度から学内外の研究者による研究プロジェクトを立ち上げて研究を進めた結果、それらの謎が次第に解き明かされてきました。平成22年度と平成23年度には、『太宰治自筆ノート研究プロジェクト成果報告集』を刊行し、解明できた点を国内外に発信しました。2冊の成果報告集は、附属図



修身脱漏ページイラスト

書館の太宰治研究文庫に配架していますので、是非ご覧下さい。また、平成24年度前期の21世紀教育のテーマ科目として「太宰治研究－官立弘前高等学校時代の自筆ノートを手がかりに－」を開講し、プロジェクトに参加した教員等によって研究の成果を学生諸君に披露し、太宰についての関

心を深めるようにしました。

太宰治自筆ノートは本学の財産として大変貴重なものですので、2010年、貴重資料に指定され、現在、附属図書館の貴重資料保管室に保存・保管されています。約90年近く経過していますので、ノート自体の痛みも激しいことから、原本の公開は制限しております。ただし、複製（レプリカ）は本館2階のサービスカウンターに申し出れば、いつでも閲覧できますし、同じく2階の雑誌室の展示ケースにもノートの一部を展示していますので、ご覧下さい。



感謝状贈呈式

平成24年度 弘前大学芸術祭「プレミアム」 が開催されました

弘前大学芸術祭は、弘前大学の学生及び教職員の芸術活動を奨励し、その発展を期し、地域との交流を深めることを目的として平成19年度から実施しています。

平成23年度からは芸術祭「プレミアム」と銘打って大学行事として参加団体を一堂に集め、その芸術活動を学内外にむけて広く発信しています。

芸術祭「プレミアム」としては2回目の今年度、6月16日(土)、17日(日)の2日間にわたって10団体が音楽、演舞、演劇、ダンス、お笑いなどのパフォーマンスを披露しました。

【1日目】



よさこいサークル焔舞陣



お笑いサークルWPS



フィルハーモニー管弦楽団

ありがとう」という観客からの感想が全てを語っているようです。

会場の中を、ピエロがパフォーマンスだけで観客と会話をしながら動き回るところから始まった大道芸Mochaの演技は、「大道芸のレベルが高くてすごかったです」という感想も聞かれ拍手喝采の嵐

でした。

ストリートダンスA.C.Tは、激しく妖しく美しく、観客をもリズムにまきこみ「カッコイイ」、「最高」、「明日も観たい」と絶賛されました。

「大道芸やストリートダンスに対するイメージががらりと変わった、感動した」と評してくれた人もいました。

よさこいサークル焔舞陣の激しく美しい演舞で初日の幕があき、若さと力強さがみなぎる演舞を披露しました。「息のあったすばらしい演舞に感動しました。泣きました」という感想があったほどです。

岩木ホールで行われたお笑いサークルWPCのコントや話芸は、会場が暑く感じられるほど盛り上がり、「めっちゃおもしろかった」「久しぶりにお腹の底から笑った」とお笑いサークルとしては最高の感想をいただきました。

大学会館広場ステージでは、JAZZ研究会がすばらしく伸びやかな歌声と心地よいリズム音楽を披露し、「JAZZがこんなに心地よいものだと思わなかった」と、賞賛されました。

フィルハーモニー管弦楽団は、安達弘潮名誉教授の指揮のもと、ダイナミックでかつ繊細な音色でベートーヴェンの世界へ観客を引き込んでいました。「心豊かな時間を



JAZZ研究会



ストリートダンス A.C.T



犬道芸 Mocha

【2日目】



津軽三味線サークル



リラックススター



マンドリン倶楽部

2日目は津軽三味線サークルの演奏で幕が開きました。「迫力満点若さが伝わりました。大勢の方の演奏は初めてで別世界」と、そのエネルギッシュな演奏が会場全体を包み込んだようでした。

続いてのクラシックギタークラブは、静かに時に激しく、しっとり4人の独奏と4組の重奏を聴かせてくれました。観客の感想の中に「センチメンタルな気分になりました」とあったのがうなずける演奏でした。

劇団プランクスターは、オリジナルシナリオの「脳内会議」をテンポ良く演じ、「30分のわりに内容があっておもしろかった」、「30分といわず1時間くらい観たかった」と、観客をとりこにしたようです。



クラシックギタークラブ

最後のマンドリン倶楽部は、「ナポリの唄」などを一般によく知られている曲を中心に透き通った音色を披露して

いました。「リラックスできる音色でとても良かった。また聴きたい」と会場全体が癒やされているようでした。

こうして、2回目となる平成24年度の芸術祭「プレミアム」は無事終了しました。2日間で延べ500名の市民の来場をいただき、アンケートではいずれの団体も好評を得ていましたが、2日目の日曜日の観客が思ったより少なかったことなど広報の仕方などに課題も見えました。

一方で、いろいろなジャンルのパフォーマンスを一堂に集めて披露することで、もしかしたら今までは進んで観ることのなかったパフォーマンスを見直す良い機会だったのではないかと自負しています。今後、広報の仕方を見直し、大勢の方に一つでも多くのパフォーマンスを観ていただけるよう努力していきたいと思っています。

最後に、ポスターをデザインしてくれた今里奈さん、ご来場いただいた皆さま、そして参加団体の皆さん及びご協力いただいた全ての方々へ、心から感謝いたします。ありがとうございました。



保健学研究科 「柏倉・門前・吉野」教育・研究グループ



写真1 平成24年度 新人歓迎交流会(平成24年4月6日)

2002年4月、設置後間もない医学部保健学科に柏倉が着任して以来、本グループは今年度で11年目を迎えます。大学院保健学研究科は大講座制の為、研究室という意味では私一人となりますが、現在縁ある2名の若手と教育・研究グループを組織しております。これまで32名の学部卒業研究に携わり、博士前期課程13名、博士後期課程3名の修了生を輩出して参りました。その過程で2005年4月から東京大学医科学研究所より高橋賢次助教(現・鳥取大学農学部准教授)が着任し、2010年3月迄の5年間研究室の教育・研究の進展に大きな貢献をしてくれました。その間に、保健学科1期生の門前暁君が卒業研究から、修士課程、博士課程と進学し、履修期間を半年繰り上げて2009年10月に修了し、以降助教として一緒に教育・研究に携わっています。翌年に、2期生で博士課程在籍の吉野浩教君が助教採用となり、現在は全員の科研費等の研究費も集約する名実共に教育・研究グループとなりました。本グループでは、年頭に

卒論生のテーマ、学会発表や論文投稿の当該年度計画を立て、前年の目標達成の検証と併せて、具体的な成果目標達成と世界への情報発信を積極的に図って来ております。今年度は、学部卒論生5名、博士前期課程及び後期課程に新たに各2名が加わり、それぞれ5名及び6名の在籍者数になります。共同研究を行っている理工学研究科・吉澤篤研究室の大学院生、医学研究科大学院生に事務担当者を加えると総勢20名を超えます。また、後期課程には韓国からの留学生も加わり、研究室のささやかな国際化のスタートとなりました。集合写真は、2012年度開始早々に開催した恒例の新人歓迎交流会で撮影したものです(写真1)。

恒例行事としては、毎週学部卒論生及び大学院生のセミナーをそれぞれ開催しています。大学院セミナーには専門が近い同じ分野の教員も加わり、より多様な情報の吸収の場として活用しております。また、研究遂行に様々なアイデアや示唆を得、更には学部学生や大学院生への一種のキャリアパ



弘前大学・北海道大学交換研究会(平成23年9月23日 北海道大学大学院保健科学院)

ス教育も兼ねて学内外から講師を招いた研究セミナーを年に数回開催しています。学部卒論生の卒業研究発表会は11月末に開催される為、それまでに卒業論文を完成させて発表に臨むのを恒例にしております。得られた成果は必ず原著論文にして来ました。学術発表は、毎年春に開催される日本放射線腫瘍学会生物部会と、秋の日本放射線影響学会を主な研究発表の場としており、大学院生は必ず何処かで全員参加、発表します。学術集会への参加や発表は、自らの研究の位置付けに直接触れ、今後の研究の展開を考える格好の場です。更に他大学の先生方や学生さんとも交流を深めることが出来ます。博士後期課程の学生は国際学会での発表に積極的に参加させてきました。これまで米国(サンフランシスコ、ボストン、ハワイ)、ドイツ(ハンブルグ、ベルリン)、オーストラリア・シドニー、ギリシャ・アテネ、ポーランド・ワルシャワ等で開催された放射線や血液の国際会議で発表してもらいました。リフレッシュとしては、毎年岩木山麓の桜林公園での時期外れの花見というか焼肉大会、卒論打ち上げ兼忘年会、新年会や学会参加中の懇親会など、メンバー相互の交流を積極的に行い(只飲み会が多いですが)、コミュニケーションの維持に努めております。

2008年からは、同じ診療放射線技師教育に携わる北海道大学医学部保健学科・伊達研究室と「弘前大学・北海道大学交換研究会」(HH交換研究

会)と称した合同の研究セミナーを開催しています。第1回目は、伊達教授以下研究室のメンバーが弘前大学を訪れ、相互の研究成果について討論し、懇親会を開催しました。翌年はこちらから北大を訪問し、以来相互の訪問を続け、本年は10月7日に弘前大学で開催予定です。その成果として、北大卒業の辻口清隆君(弘前市出身)が、本年4月より本グループで研究生活を開始しました。今後さらなる教育・研究上の交流を積極的に進め、ネットワークをさらに広げられればと考えております。こうした活動の詳細はホームページをご覧ください(<http://www.hs.hirosaki-u.ac.jp/~kashiwakura/>)。

研究室が現在取り組んでいる主な研究テーマは下記の内容です。1)造血幹細胞や樹状細胞の分化・増殖に対する放射線の影響評価とサイトカインの作用、2)放射線曝露個体の治療法に関する基礎的検討、3)液晶性化合物を中心とした低分子化合物の新たな生物学的な機能評価、4)臍帯血細胞の性質に及ぼす母体・新生児各種因子との関連性。このうち研究テーマの柱は、造血幹細胞の放射線感受性とサイトカインの作用についてです。所謂放射線生物学の範疇に入りますが、多くの場合、放射線でがん細胞を如何に制圧するかを主題とする分野では、正常幹細胞への障害影響研究は、国内ではマイナーな存在で、国際的にも決して多くの研究者がいる訳ではありません。自称

Ⅲ 研究室紹介

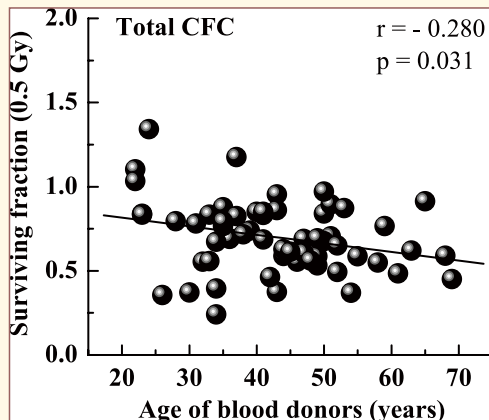


図1 ヒト造血前駆細胞の放射線感受性と年齢との関連
J Radiat Res, 52(3):293-299 (2011)

「隙間産業」とも言える存在です。然しながら、昨今幹細胞への放射線影響研究が活発化し、さらには3・11の東日本大震災による東京電力福島原子力発電所事故以降、放射線の正常細胞への影響研究の重要性が高まっております。現在は、復興支援の一助として、弘前大学機関研究「東日本大震災対応放射線科学研究プログラム」にも取組むと共に、新たな放射線防護剤研究をスタートさせています。

特に現在力を入れているのは、ヒト造血幹細胞の放射線感受性の個体差についてです。図1は、ヒト末梢血中の造血前駆細胞に0.5Gy照射した場合の生存率と年齢との相関性を検討した結果です。この結果からは、加齢と共に生存率が低下すること、若年層では生存率が1を越える、即ち放射線に応答して造血が亢進した個体が7%ほど存在し、感受性には大きな個体差があることを示しました。現在、この個体差に関与する因子の探索も行ってありますが、これまで抗酸化システムで主要な役割を担うNrf 2標的遺伝子のうち、NQO 1の初期発現と生存率との間に高い相関性を確認しています(図2)。液晶性化合物を中心とした低分子化合物の新たな生物学的な機能評価では、卒論前から研究室に関わり、学位を取得した羽澤正勝君(現・放射線医学総合研究所研究員)が中心となり、自らの研究テーマと併せ、多くの研究業績を挙げました。

研究の重要な生体試料であるヒト造血幹細胞は、現在主に臍帯血から分離・精製していますが、こ

の臍帯血確保が我々の研究推進の大きな課題の一つでもあり、私の就任以来の課題でもあります。これまで、前任地も含めて約15年間五所川原市の福士助産所、国立弘前病院や弘前大学医学部附属病院のご厚意で、何とか研究を続けて来ております。然しながら、頂いた臍帯血から造血幹細胞を分離・精製するには多くの費用と時間を要する為、事前にある程度の予測が可能となればという点は、研究を始めた当初から課題としてありました。この点に興味を持った大森厚子さんが大学院に入学し、臍帯血細胞数に及ぼす母子因子との関連性を課題に業績を挙げ、2011年3月学位を取得しました。その間助産師の千葉貴子さんが修士を取得し、現在は同じ助産師の蝦名智子さんが博士課程に在籍中で引き続き検討を行っています。大変興味深いことに、この解析を進めるうちに、国内の出生数、母体や胎児の体格の変遷にも触れ、そこから日本の少子化のみならず、先進国では稀な女性の「やせ」や低体重児増加が垣間見え、日本の未来に大きな危惧を抱くに至っております。やや大げさに言えば、妊娠時の母体管理は未来の日本を創るとも言えると感じております。

我々大学人の最大の使命は、人材育成にあると思っております。我々のささやかな教育・研究活動を通して学生の知的好奇心が育まれ、新たな出会いや喜びの発見と共に次の世代を創る人材輩出に少しでも貢献出来れば望外の幸せであります。古き城下町、歴史の街弘前で新たな発見や創造を目指し、さらなる前進を続けて参ります。

(以上柏倉記)

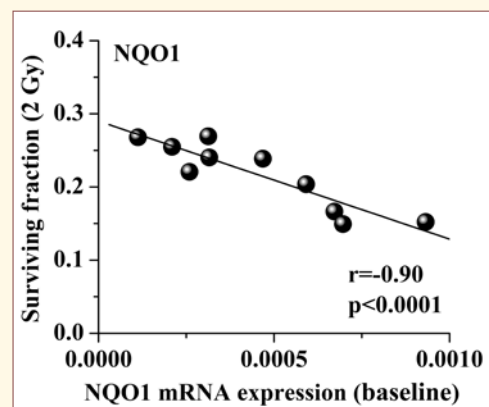


図2 NQO1の初期発現と造血前駆細胞の生存率との関連
Radiat Res, 174 (2): 177-184 (2010)

保

健学研究科

すこやかコミュニティ支援センター

生活習慣病フォローアップ部門



笑顔でサポート「健康教室前の生活習慣病セルフマネジメントサポーター」

「地域の課題解決と学生の実践能力育成をリンクする」

私たち、すこやかコミュニティ支援センター生活習慣病フォローアップ部門では、青森県の疾病構造に深くかかわる糖尿病の療養支援を中心に部局横断的かつ地域との連携をとった活動を展開してきました。青森県は、がんや高血圧、糖尿病などの基礎疾患が原因となる心筋梗塞や脳卒中などの致死性疾患での死亡率が高く、長い期間短命県1位の状態が続いております。疾患予防にむけた啓発活動、生活習慣改善、がん検診率の向上など、課題が非常に多いですが、一人ひとりが質の高い満足した生活を送っていくためにも合併症予防などQuality of Lifeの維持への関わりも大事な支援と

なってきます。

これまでの活動は、公開講座などの地域貢献事業、学生への教育、地域課題に密着した研究の3つに集約できます。まず1つ目の地域貢献事業についてです。動脈硬化性疾患の原因となる糖尿病予防と合併症の発症予防に焦点を当て、多職種がチームとなって支援できる複合的健康プログラム（以下健康教室）を考案し、さらにその効果を検証してきました。医師、看護師、保健師、臨床心理士、管理栄養士、そして健康運動指導士が携わっています。降雪による冬期間の運動の中断が防止されるように考慮されたプログラムであり、医療

Ⅲ 研究室紹介

機関との連携を取りながら、専門的支援による安心感も同時に提供されます。また、同病他者との交流ができるセルフヘルプグループとしての役割もあることから、継続を望む声が大きく、特定非営利活動法人 青森県健康・体力づくり協会と連携して開催し、今年で8年目となります。平成22年度からは、白神山地や黒森山などの地域の自然環境を堪能でき、生活習慣病など慢性疾患に罹患された方でも安心して参加できるウォーキング事業を年に1回開催しており、地域貢献としての活動も広がっています。



グループワークの様子



黒森山ウォーキングサポーター



2012黒森山ウォーキング

2つ目の学生への教育です。先に述べた事業にはマンパワーが必要です。医療従事者としての役割を実践的に学びたい、慢性疾患を抱えて生活しておられる地域住民の実際の姿について知りたいという学生には平成18年からはボランティアとして参加いただき、運営のサポートをしていただいていた。ボランティアとしての経験は、糖尿

病を抱えて生活されていらっしゃる皆さんの大変さ、元気に過ごすための工夫など学ぶことが多く、また教職員の活動から専門職者としての関わり方をいつのまにか学んでいたことがわかりました。せっかくでするので、ボランティアというだけではなく、地域の課題や住民の健康ニーズに対応できるように、生活習慣病を抱えた方への運動指導やリスク管理健康管理、そしてコミュニケーション能力を育成するための教育プログラムとして整備し、「生活習慣病セルフマネジメントサポーター育成プログラム」として、学生の皆さんに案内させていただきました。運動指導およびコミュニケーション、リスク管理に関する講義、一次救命処置の研修、運動指導や集団指導に関する実技指導を含む計12種の講義演習を卒業時まで受講し、さらに白神山地などでのウォーキング事業、地域のウォーキング大会、健康教室に参加し、10回以上ボランティア経験を重ねた学生に対し、生活習慣病セルフマネジメントサポーター（学内認定証）として修了証を発行しています。プログラムの中には、弘前市内の観光、見どころを盛り込んだウォーキングマップ作成の実践もあります。今年は、弘前市と提携し、学生たちが作成したウォーキングマップを弘前市民の健康づくりや観光資源として利用できるようにして、学んだ成果を地域にフィードバックすることにしました。自分たちの活動が世の中の役に立つという経験を通して、医療職の意義、やりがい、そして柔軟な発想を生み出す創造性を培ってもらえるのではないかと期待しています。サポーターの認定は、慢性疾患への健康管理にむけた専門知識の学習経験の保証に



ミニ講義の様子

加え、就職活動のアピール材料として活かしてもらっています。平成22年度は6名、23年度は11名修了し、現在43名の学生が受講しています。参加する学生の皆さんは、認定をもらうためというよりも健康教室に参加して、患者さんたちとコミュニケーションをとったり、指導者から直接、運動方法やリスク管理の実践を学んだり、交流を楽しみながら自然体で経験を積んでいるように見受けられます。セルフマネジメントサポーターを修了した学生が卒業後、地域でどのように活躍しているのか、どのようなキャリアアップをしているのか、教職員一同、非常に楽しみにしています。

3つ目ですが、本部門では、地域のQOLや医療の質向上に寄与するための研究活動も重要視しています。特に生活習慣病予防と動脈硬化性疾患の発症予防に関して、青森県特産品の健康増進効果の検証、地域資源を利用した運動の効果検証、運動継続に向けたアクティブビデオゲームの効果的な利用方法の検証、さらに、保健医療専門職の質向上に向けた研究として、運動指導実践能力育成プログラムおよびe-learningシステムの構築、慢性閉塞性肺疾患患者の運動指導支援プログラムの開発なども進めています。

昨年度は、東日本大震災の影響で本部門の教職員も福島原発の事故後の避難所における被ばく線量の測定や一時帰宅の支援などに赴き、不安な気持ちをもちつつも、これまでと変わらない活動ができました。被害の大きかった岩手県、宮城県、福島県の方々を思うとなんらかの活動ができなかったかと反省するところもあります。被災した糖尿病患者様の多くが、医薬品の不足、栄養不

足などで非常に困難を強いられたといくつか報道で取り上げられておりました。青森県では被災時の対応は十分なのか、患者様の意識は変化したのか・・・そんな疑問も出てきました。地域住民の安心・安全を保障するためには、潜在的な糖尿病患者も含め、危機管理体制について明らかにし、教訓を生かし不測の事態に備えられるように、今後、支援体制を確認、構築することも検討しています。
(以上富澤記)

(すこやかコミュニティ支援センター生活習慣病フォローアップ部門のメンバー 保健学研究科：山辺英彰 野戸結花 井瀧千恵子 北宮千秋 漆坂真弓 富澤登志子 工藤うみ 北島麻衣子 倉内静香 横田ひろみ、教育学部：田上恭子、医学部附属病院：桜庭咲子 野呂志津子 山田基矢 三上恵理、学術情報部：山田修平)



ノルディックウォーキング



学生によるストレッチ指導

IV 海外だより



ドイツでの4か月間：積極性

教育学部教育学研究科 教科教育専攻 美術教育専修
沖津明日見

こんにちは。今年の3月下旬から、ドイツのトリア大学で留学している沖津明日見です。ドイツに来てからすでに4か月が経ちました。その中で自分が感じ、学んだこと、今経験していることなどをお伝えしたいと思います。

まずこの4か月は、自分の意見を相手に伝える重要性や、積極的に発言したり行動したりすることの重要性を教えてくださいました。たとえば、毎日私たちはDAFと呼ばれるドイツ語のコースを受けているのですが、その授業の中では必ず自分の国やドイツの文化についての発言を求められます。当初は、欧米の学生が主に発言していたのですが、私も負けていられないと感じ、積極的に発言するように心がけました。すると、より授業が楽しくなり、その姿勢が先生にも伝わったのか、授業でもよく当ててもらえるようになりました。また、

発言することは、その際に授業内容（テキストの内容や先生の話している内容）が理解できているか、自分の言いたいことをドイツ語で伝えられるかが試される良い学習にもなったと思います。実際に、4月当初は早く聞き取れなかったことが多い先生の話も、今では大体理解できるようになりました。

この4か月の間には長期休みもあり、私は友達二人とウィーン（写真1, 2）に行ってきました。ドイツに来てから初めての外国旅行だったので若干不安はあったのですが、本当に素晴らしい場所でした。美術館は、美術史美術館、レオポルド美術館、リヒテンシュタイン美術館、アルベルティナ美術館、ベルベデーレ美術館、MUMOK（近代美術館）へ行きました。図版などで見たことのある有名な作品がいくつもあり、また近代や現代



アートも多く展示されていたので、本当に幅広く作品を見ることができました。また運よく、低価格でクラシックコンサートも行くことができました。世界遺産にも登録されているウィーン歴史地区の街並みも素晴らしく、ウィーンは本当に「芸術の街」でした。

さらに、大学で企画されているExkursionというツアーにも参加しました。私はフランスのアルザス地方に位置するストラスブール（写真3）に行ってきました。街並みが絵本の中のような雰囲気でもとても可愛らしく、世界遺産に指定されている大聖堂も素晴らしかったです。またここでも美術館に行き、素晴らしい作品を見ることができました。私は日本人一人で、知らない学生たちの中に飛び入り参加したような状況だったのですが、日本学部のドイツ人学生が声をかけてくれ、楽しく観光できました。しかし日本学部といっても留学経験のない学生だったので、ほとんどドイツ語で会話しました。この日も、語彙の少なさを感じ、ヒアリングに関してももっと努力しなければと強く感じました。

トリア大学では、7月最終週からほとんどの学生が夏休みに入ります。長期休みといえば、やはり近隣諸国や国内の遠距離旅行です。さっそく私も国内のカッセルを訪れてきました。今、カッセルでは

5年に一度の世界的なモダンアート・フェスタ「ドクメンタ13」（写真4, 5）を見ることができます。今回のテーマは「崩壊と再建」ということもあり内容が深く、作品の前で考えさせられることがたびたびありました。さらに日本では決して見ることのできないアラブ系の作家の作品や、世界的に有名な作家の作品を見ることができました。

夏休み中には、国内ではミュンスターやミュンヘン、国外ではパリやロンドン、バルセロナを訪れるつもりです。各地で様々なことを体験したいと思います。そして長期休みは集中して勉強できる機会でもあります。ドイツ語の勉強はもちろん自分の修士論文についても進めていくつもりです。充実した夏休みを過ごすために、一日一日を大切に過ごしていきたいです。



V 新任教員紹介



医学研究科 腫瘍内科学講座 教授 佐藤 温

この度、平成24年7月16日付けで着任いたしました、佐藤 温と申します。出身大学は沖縄で、卒後は東京で研鑽をつんできました。座右の銘は「なんくるないさあ（何とかなるさ）」で、大切にしている言葉は「ぬちどうたから（命が宝）」です。腫瘍内科学は“がん”を患った方々に対して、科学の力と関係の力で医療を展開する学問です。“いのち”について多くの方と語らっていきたいと思っております。

VI けいじぼん

薬物乱用防止講習会開催



6月7日（木）17時40分から、総合教育棟1階101講義室において、弘前警察署第二課長成田卓哉氏を講師に薬物乱用防止講習会を開催しました。講習会は、中村学生課長の挨拶の後、薬物の使用に関するビデオを上映し、第二課長成田氏から、乱用されている主な薬物での青森県内の逮捕状況等の説明があり、最後に質疑応答で無事終了しました。

学生及び教職員25名が参加しました。

遠藤正彦弘前大学前学長 退任記念植樹式を挙行



6月22日（金）、本学事務局前において、今年1月末日で任期満了により退任された遠藤正彦前学長の退任記念植樹式を挙行了しました。

植樹式には、遠藤前学長御夫妻を始め、佐藤学長、江羅総務担当理事ほか弘前大学役員、各部局長等多くの職員が出席しました。

式では、佐藤学長と遠藤前学長が白木蓮及び紫木蓮を『遠藤正彦学長退任記念樹』として植樹した後、記念プレートの除幕を行いました。久しぶりに弘前大学事務局を訪れた遠藤前学長御夫妻は、華やかな式の後、和やかな雰囲気の中で役員や事務局職員等と旧交を深めていました。



平成24年度 学生ボランティア活動助成

平成24年度学生ボランティア活動助成の募集について9件の申請があり、下記の団体が承認されました。選考結果の通知書は、平成24年6月22日（金）に学長から交付され、「ボランティア活動に込められた期待は大きいですが、自らを育むことにもなるので頑張りたい」と挨拶がありました。交付式に続いて懇談会が行われ、学生から各活動についての報告が行われました。



団 体 名	申 請 代 表 者 名
児童文化研究部KIDS	清 水 瑞 希 (教育学部)
僻地教育研究会	笹 木 勇 人 (教育学部)
さくらボランティア	佐 藤 陽 (教育学部)
ひまわりサークル	内 田 千 遙 (教育学科)
SaBoTen	山 下 浩 史 (教育学部)
環境サークルわどわ	加 藤 裕 介 (理工学部)
teens & law	田 村 結 愛 (教育学部)
アダプテッドスポーツサークル爽～so～	黒 川 裕 司 (教育学部)
キャリアサポート研究会	阿 部 太 郎 (教育学部)

弘前大学「特別研究助成制度認定状交付式」を実施



弘前大学では、平成21年度より博士後期課程に入学した学生のうち、先端的な研究やユニークな研究を行う者に対して研究助成金として一人50万円を支給し、その研究を支援している。

今年度は大学院医学研究科、保健学研究科、理工学研究科、地域社会研究科及び岩手大学大学院連合農学研究科（弘前大学配属）の大学院学生14名の研究を助成の対象として認定し、7月24日（火）に認定状交付式を行った。

交付式では出席者への認定状交付の後、佐藤弘前大学長より学生に対して研究活動に対する激励の言葉があった。

VI けいじぼん

弘前大学「教育に関する表彰式」を実施

弘前大学では、前年度において優秀な成績を修めた学生及び教育に関して優れた業績を上げた教員を対象として、8月1日（水）に事務局大会議室で表彰式を実施した。

今回の受賞者は、各学部等から推薦された教員7名、学生26名で、表彰式には、中根理事（教育担当）及び各学部長・研究科長も出席し、佐藤学長から一人ひとりに表彰状と副賞が贈呈された。



佐藤学長（前列左から5人目）と表彰学生



佐藤学長（前列左から4人目）と表彰教員

これを受けて、学生を代表して医学部保健学科3年の及川理奈さんから、教員を代表して農学生命科学部の吉田孝教授から謝辞が述べられ、表彰式は和やかなうちに終了した。

VII 編集後記

今年オリンピック年、7月28日から8月11日までLondon2012が開催されました。丁度、夏休みの期間中、学生の皆さんも日本選手だけでなく外国の選手の活躍に深夜また早朝までのテレビ観戦で気温の上昇以上に熱くなったことでしょうか。弘前ねぶた祭りの終わりとともに朝夕少し涼しくなるのですが、まだ残暑厳しい毎日が続いています。夏バテにご注意を！

さて、学園だより175号をお届け致します。本号では、弘前大学施設の特集としてイングリッシュ・ラウンジと附属図書館を取り上げました。イングリッシュ・ラウンジは今年4月に開設された新しい施設で、弘大生の英語力アップに繋がる教育を担当し、セミナーやイベント等の開催を計画しています。附属図書館は新たな整備とこれまでの取り組みで利便性が更に強化されました。また、新設コーナーもオープンしました。学生さんが本号を読まれてこの二つの施設の利用がますます増え、勉学に励まれることを願います。(O)

2012年8月8日(水)

オープンキャンパスが開催！約6500人が来校しました。

—弘大生協ではドリンクやアイスのプレゼントを行いました—

クイズ大会には約323人が参加



佐藤学長から
ご挨拶いただき
ました

学生委員会の
「なんでも相談」も好評！



アイスのサービス、2965本！



アンケートに
答えてガリガ
リ君ゲット！

オープン
キャンパス初
の試み！

住まいの相談会に約50人が来場



サークル紹介も、
盛り上がりました。



4～7月の学生総合共済の給付事例

- ・急性上気道炎（マイコプラズマ）で入院5日。
 - ・アメフトの試合中、相手選手とぶつかり左手小指を骨折。通院9日。固定具あり。
 - ・洗濯機の排水ホースが外れ、階下の天井がはがれた。（学生賠償責任保険と按分。）
- 夏休み中にけがや病気をしたら、窓口（たびshop、医学部 FERIO）にお越しください—



弘前大学生協の使命

私たちは、魅力ある充実したキャンパスライフを目指すため、以下の三つの使命を掲げ、協同の力で行動していきます。

- 一、安全安心のくらしと、感動・喜びの今を創造します。
- 一、弘前大学と共に魅力ある大学づくりに取り組みます。
- 一、人と地球にやさしい、持続的発展可能な社会を目指します。

弘前大学生協生活協同組合（TEL:0172-34-4806）



人文通り



青春之像



理工学部 フーコーの振り子 (日本最大)

弘前大学 VOL. 175

学園だより

2012年9月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。

e-mail: jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学学務部学生課



HIROSAKI
UNIVERSITY

国立大学法人 弘前大学「学園だより」編集委員会

- 委員長 今井 正浩 (教育委員会)
委員 保田 宗良 (人文学部)
出 佳奈子 (教育学部)
松谷 秀哉 (医学研究科)
西村 美八 (保健学研究科)
宮本 量 (理工学研究科)
大町 鉄雄 (農学生命科学部)
澤田 祐子 (学生課)
小山内英子 (学生課)

印刷：青森コロニー印刷